

## 第8回考古天文学会議の目的と趣旨

考古天文学会議代表 北條芳隆（東海大学文学部教授）

### 1. 組織の概要

考古天文学会議は2019年4月に発足した考古学・歴史学・文化人類学・天文民俗学・天文学を横断した学術研究組織である。過去の天体運行や天文現象と人類の営みとの関係を学問的に捉え直すことを通じ、日本の学界や社会に考古天文学の有効性や魅力を認知・定着させることを目的として発足したもので、事務局は国立天文台に置いている。活動の資金源は日本学術振興会の科学研究費助成金である（別紙参照）。

発足後は年に2回の開催を目途に、これまで東京都の国立天文台三鷹キャンパスや名古屋市南山大学、佐賀県吉野ヶ里歴史公園や大分県宇佐市教覚寺などを会場に7回の研究集会を開催しており、領域横断的な研究者間の意見交換を進めると共に、考古天文学への関心が各方面で高まることを期待しつつ活動を行っている。

### 2. 第8回会議の趣旨と目的

#### ① 第7回までの成果と活動実績

第7回までの会議では、考古学班が主担当となり、本州の弥生文化や古墳文化に焦点を当て、過去の太陽と月の運行と祭祀の関係を掘り下げる研究を進めてきた。その過程で日の出暦や月の出暦の問題が浮上し、現在の主題は先史・原史時代における暦の解明へと議論は進展している。また文献史学班では『六国史』に記載された日蝕や月蝕など天体現象のデータベース化を完了し、古代における記録と実際の現象との突き合わせを進め、一定の成果が得られている。一方、天文民俗班では琉球地域や北海道での星辰信仰に関わる事象の抽出を進めている。

さらに第6回と第7回には、問題となる弥生時代・古墳時代の遺跡からみた過去の天体運行を再現し、一般市民に向けてエアドーム・プラネタリウムを上映する活動を行った。毎回の上映は満席となる好評であった。さらに第7回のプラネタリウム上映では、地元の小学生4名がナレーター役を担い、好評を博した。研究会もプラネタリウムも完全な無料公開としている。

#### ② 第8回の趣旨

第8回は2日間の開催とし、1日目はアイヌ文化の星座観に焦点を当てたプラネタリウム上映を計画している。また2日目の研究集会についても天文民俗班と文化人類学班および考古学班からの話題提供として、北海道の縄文文化とアイヌ文化の星座観をテーマとするシンポジウムを計画している。

以上